

青柳 健著 『郷愁の山』

山に登るようになって45年以上経った。学生の頃は年間100日近く山で過ごしたと思うが、就職して子供が出来てからは仕事や家庭のことなどの世事にかまけていつの間にかやめてしまった。年齢50になった頃から会社での仕事やポストの行く先も段々と見えてきて、このままでは一生使い捨てで終わってしまうし、何か会社以外のことを身に付けなければ孫と炬燵猫の守しかすることが無くなってしまうということに気付いたが、さりとて、仕事の合間を工面して新しい勉強を始める余裕も時間もなく、また、平々凡々たるヌルマ湯から抜け出す勇氣も無かった私には、せいぜい昔取った杵柄きねづかの山でも再開してみるかというくらいなものであった。そのような訳で山に登ってきた時間は実質的には20年ほどである。

再開してから一番面食らったのは、学生の頃使った道具や技術が全く浦島太郎になっていたことであった。新しい道具に買い換えて登山スクールなどにも通ったが、旧弊なワタシには登山のスタンスなどイマイチぴんと来ないことも多かった。

学生時代に一緒に登っていた連中はパンチョを除いて卒業後は全て山から遠ざかってしまった。現在一緒にいる岳友はこの頃からお付き合いを始めた方々ばかりである。これはこれで大いに楽しい山仲間ではあるが、若い頃の無鉄砲な山と一緒に苦労して登った青春の群像も忘れられない（もう山と一緒に登ることはないが、酒の方の付き合いは健在）。特に我々は伯耆大山がホームグラウンドであったし、大学のヒュッテもそこにあったので、♪巻き割り、飯炊き、小屋掃除、皆んなで皆んなでやったけ・・・♪が懐かしい思い出である。

余談が長くなった。著者の青柳健は私より10歳以上年上だと思うが、登山の世代はほぼ同時代、山へのスタンスにも共感するものがあって、雑誌「アルプ」に載った文章など、よく読んだものだった。この本の中に出てくる「春山の歌」という章の中に、原稿用紙にして僅か6枚ほどの「或る招待状」という一文がある。かつて通っていた山深い山小屋から20年振りに差出人不明の招待状が届いて、すっかり音信不通になっていた昔の山仲間の顔が揃い、往時にかえって高歌放吟、濁酒と獣鍋の酒盛り。世相は20年前とすっかり変わってしまったが、岳友の心情は昔のままで、懐かしい感激に浸ったという話であるが、実はこのような招待状が来ないものと20年間も淋しく待ち続けているという空想の郷愁記である。 朋文堂ケルン新書 1965 年刊

